日本大学経済学部中国･アジア研究センター

Center for China and Asian Studies
College of Economics, Nihon University

NEWS LETTER

No. 8
March, 2011

Contents

Ⅰ　学術講演会

『趙紫陽と李登輝の志と生きざまに学ぶ』
宇沢　弘文（東京大学名誉教授）

Ⅱ　国際シンポジウム

「現代アジア社会における華僑・華人の社団とネットワーク」

2010年度活動報告

Ⅰ　共同研究機関リスト
Ⅱ　共同研究
Ⅲ　学術講演会
Ⅳ　国際シンポジウム
Ⅴ　Working Papers
Ⅵ　2010年度中国･アジア研究センター運営委員

学術講演会

国際シンポジウム

国際シンポジウム：講演

Ⅰ　学術講演会

「趙紫陽と李登輝の志と生きざまに学ぶ」

宇沢　弘文　（東京大学名誉教授）

【講演要旨】

今回の「趙紫陽と李登輝の志と生きざまに学ぶ」というタイトルは古い二人の友人であった趙紫陽氏と李登輝氏の志と生きざまを紹介し，できるだけ数多くの日本人が中国および台湾の歴史，文化，社会，経済を理解し学ぶことにあります。

趙紫陽

1980年代の初め頃，中国・瀋陽の近郊の農村にしばらく滞在して，当時始まったばかりの請負生産を中心とする農村改革の実態について調査する作業に従事したことがある。当時の農村の言葉に言い表せないような悲惨な現実と共産党幹部による徹底的な搾取を知って，強烈な衝撃を受けた。当時「資本主義的搾取には市場的限界があるが，社会主義的搾取には限界がない」と題する報告書をまとめて，党中央に提出した。すぐに北京に呼び戻されて，厳しい査問を受けて，もう日本に戻れないと覚悟を決める出来事があった。その当時，一番若く末席に座っていた人物が「宇沢教授の主張には一理ある」と言って，私を弁護してくれたが，その人こそが趙紫陽氏であった。その後，総書記になられてからもよく会う機会があった。あるとき，中南海のご自宅に招かれたとき，中国でこれまで行われたいくつかの五カ年計画がすべて失敗してしまったことが話題になった。私が「党中央は常に誤謬を犯すという前提に立てば，それまでの5カ年計画の失敗は合理的に説明できる」と話したとき，趙紫陽氏からの提案で「政府の統計センターに入っているデータ，資料をすべて出すから，証明してほしい」ということになった。その作業は思ったより大変だったが，89年7月21日，北京で国際シンポジウムを開催し，その成果を発表するということにまでなっていた。ところがその直前に天安門事件が起こり趙紫陽氏は失脚し，亡くなるまで自宅に幽閉され，国際会議どころか，その後彼と会う機会もなくなった。

李登輝

2000年5月，李登輝氏のご招待で私は台湾を訪れる機会を得た。一週間ほどの滞在だったが，数多くの出会いがあり，また李登輝氏自身の生き様と志を直接お聞きすることができた。

1970年，ニューヨークで，台湾統領である蔣経国氏が独立運動の志士に狙撃され重傷をおった。台湾の人々が自分たちをこれほどまでに憎んでいることに衝撃を受けた蔣総統は，台湾大学教授定年直前の李登輝氏を呼び，副総統となり，自分の後継者になってほしいと依頼したということがあった。李氏は宣教師として少数民族のために余生をおくりたいと，その要請を断られたが，その言葉に蔣総統が感動して，三度，副総統の就任を要請し，李氏もとうとう断りきれず，受諾されたという。李登輝氏はまた，総統になられたとき，二つのことを誓って，任期中，実行に移された。第一に憲法を改正して，民主主義的なルールによって国家権力の承認が可能になるようにすることと，第二に国民党支配下にあった軍隊を政府の支配下に置くことであった。李登輝氏は，新しい総統が，民主主義的なルールに従って，国民の選択に基づいて総統として選ばれるようにし，またさらに同時に，アメリカに亡命していた嘗ての独立運動の指導者たちが合法的に帰国できるようにした。民主主義的なルールにしたがって国家権力を継承するという中国五千年の歴史で最初の偉業は，この李登輝氏の遠謀深慮によって初めて実現したのである。

李登輝氏は，中国との苦悩に満ちた関係において，自らの人間的尊厳を守り，魂の自立を図りながら，台湾国総統としての立場を守り，台湾の真の意味における独立を目指して，超人的な努力をなされてきた。李登輝氏また，日本の植民地統治については，全体について高い評価を持っておられ，特に後藤新平氏が遺した社会的共通資本の蓄積が，戦後の台湾の経済的，社会的発展に大きな役割を果たしたことを強調されている。

李登輝氏のお考えは，私たち日本人にとって，たいへん貴重なものであると同時に，二十一世紀における東アジアの平和と発展の基礎となることを図っているように思われる。李登輝氏の言葉を通じて，できるだけ数多くの日本人が台湾の歴史，文化，社会，経済を理解することを願うこと切なるものがある。

（2010年12月16日）

Ⅱ　国際シンポジウム

「現代アジア社会における華僑・華人の社団とネットワーク」

1. 日　　時　2010年12月11日（土）13:00 - 18:00
　　12月12日（日）　9:30 - 17:00
　場　　所　日本大学経済学部7号館13階会議室
　使用言語　日本語・中国語（通訳付き）

2. 内　　容

本センターでは，2010年12月11日（土）および12日（日）の2日間にわたり，中国，香港，台湾

からの研究者を招いて国際シンポジウムを行った。このシンポジウムは，2008年度～2010年度までの3年間のセンタープロジェクト「現代アジア社会における華僑・華人のネットワーク」（清水純代表）の第3年目の成果報告として行われたものである。本研究プロジェクトは，中国厦門大学南洋研究院の庄国土院長および香港中文大学の蔡志祥教授が海外メンバーとして参加しているものである。

庄国土院長は厦門大学において若手研究者によるチームを編成して，調査研究をすすめ，シンポジウム直前には厦門大学出版会から『近30年来東亜華人社団的新変化』という成果報告書を出版した。本書は中国の国家重点プロジェクトによる研究と日本大学中国アジア研究センタープロジェクトの両方の研究成果であり，本学部の清水純教授，およびプロジェクトメンバーの潘宏立・京都文教大学教授，崔晨・拓殖大学海外事情研究所客員研究員の3名も寄稿している。シンポジウム開会にあたり，庄国土院長および清水純教授より，本多光雄センター長に本書が贈呈された。

以下プログラムに従って，発表内容を紹介する。

第一日目は，午後1時に開始され，本多光雄センター長による，開会の挨拶があった。それに続いてプロジェクト代表者・清水純教授による主旨説明が行われ，続いてプロジェクトメンバーによる研究報告が開始された。報告と討論にはすべて日本語と中国語の逐次通訳が付いた。

「中国経済と華僑の役割：1950年代を中心に」（曽根康雄・日本大学准教授）

「カリフォルニア州南部における華人新移民のネットワーク」（吉原和男・慶應義塾大学教授）

続いて，「中国からの視点」と題して，庄国土院長とともに調査研究に参加した気鋭の若手研究者たちが東南アジア地域の社団とネットワークに関する研究報告を行った。

「中比国交樹立以後のフィリピン華人社団と新たな変化」（庄国土・厦門大学教授，陳君・厦門大学南洋研究院助教）

「1980年代以後のマレーシア華人社団の新たな発展」（鄭達・厦門大学大学院生）

「シンガポールの中国新移民社団分析の試み」（劉文正・厦門大学大学院生）

「ポスト・スハルト時代におけるインドネシア華人社団と多元調和社会の構築」（丁麗興・厦門大学大学院生）

「1970年代中期以後のミャンマー華人社団の発展と変化」（陳丙先厦門大学大学院生）

1日目はこれらの発表の後に，2人のコメンテーター（曽士才・法政大学教授，谷垣真理子・東京大学准教授）によるコメントがあり，それを受けて質疑が行われた。当初，午後6時20分までの予定であったが，コメント及び議論が続き，時間を大幅に超過して第一日目を終了した。

2日目の研究報告は9：30～12：00まで行われた。報告内容は，プロジェクトメンバーによる各地のフィールドからの報告である。

「台湾と東南アジアを結ぶ華僑・華人の社団」（清水純日本大学教授）

「韓国華僑の社団組織の現状と特徴」（李鎮栄・名桜大学准教授）

「フィリピン華人社会と閩南僑郷の同姓組織」（潘宏立・京都文教大学教授）

「東南アジア華僑・華人のビジネス・ネットワークと中国」（崔晨・拓殖大学海外事情研究所客員研究員）

コメンテーターは，吉原和男・慶應義塾大学教授および王恩美・台湾師範大学准教授であった。コメントの後質疑を行った。

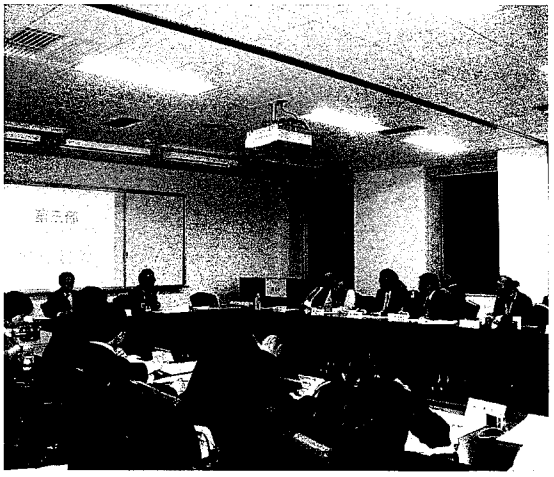
昼休みの後，午後2時からは，第二部の公開講演が行われ，海外のプロジェクトメンバーである蔡志祥・香港中文大学歴史学系教授と庄国土・厦門大学南洋研究院委員長による講演が行われた。本学7号館講堂では，プロジェクトメンバーのほか，本学学生を含む一般参加が聴講した。

講演1「家郷連係と商業ネットワーク：近代移民と故郷との相互関係」（蔡志祥・香港中文大学歴史学系教授）

講演2「東南アジア華人社団の発展脈絡」（庄国土・厦門大学南洋研究院院長・国際関係学院院長）

講演終了後，さらに会場を7号館13階会議室にもどして，2日間のシンポジウムにかかわる総合討論を行った。第三部の総合討論参加者は，プロジェクトメンバーに加えて，総合コメンテーターとして，岩瀬彰氏（共同通信社），重松伸司氏（追手門学院大学教授）が参加した。限られた時間内ではあったが，内容の濃い質疑と討論が行われ，2日間の全日程を終了した。シンポジウムには，学内，学外からの参観者があったことを付け加えておきたい。

（清水　純）



国際シンポジウム

2010年度活動報告

I　共同研究機関リスト

山東大学日本経済センター(中国)
厦門大学南洋研究院（中国）
陝西師範大学発展経済研究所（中国）

II　共同研究

包括テーマ:『多様性と柔軟性に充ちたアジア2020』
　グローバル化の流れに埋没せず，諸問題を解決してゆく方策は何か。本共同研究では，アジア地域の言語・宗教・民族・政治経済制度などの多様性と柔軟性に着目し，近未来の2020年を目途に，現代が抱える諸問題を根本から検討していく。

2008年4月～2011年3月
「現代アジア社会における華僑・華人ネットワーク：社会・文化的側面からの分析」
　清水純　（日本大学経済学部教授）
　曽根康雄（日本大学経済学部准教授）
　吉原和男（慶應義塾大学文学部教授）
　曽士才　（法政大学国際文化学部教授）
　庄国土　（厦門大学南洋研究院院長兼教授）
　蔡志祥　（香港中文大学歴史系教授）
　潘宏立　（京都文教大学教授）
　李鎮栄　（名桜大学国際学群教授）
　崔晨　　（拓殖大学海外事情研究所華僑研究センター客員研究員）
　玉置充子（拓殖大学海外事情研究所華僑研究センター客員研究員）2010年1月～10月の参加

2009年4月～2012年3月
「アジア企業における経営理念の生成・継承・伝播に関する調査研究」
　三井泉　（日本大学経済学部教授）
　大森信　（日本大学経済学部准教授）
　住原則也（天理大学教授）
　岩井洋　（関西国際大学教授）
　村山元理（常磐大学教授）2009年4月～6月の参加
　出口竜也（和歌山大学教授）
　奥野明子（帝塚山大学准教授）
　藤本昌代（同志社大学准教授）
　砂川和範（中央大学准教授）2009年4月～6月の参加
　王向華　（香港大学准教授）
　佐藤悌二郎(PHP研究所取締役・経営理念研究本部長)
　渡邊祐介（PHP研究所松下理念研究部研究部長）
　河口充勇（同志社大学高等教育研究機関特任研究員）

2010年4月～2013年3月
「新シルクロード地域の経済発展に関する研究」
　呉逸良　（日本大学経済学部准教授）
　本多光雄（日本大学経済学部教授）
　池本修一（日本大学経済学部教授）
　辻忠博　（日本大学経済学部教授）
　井尻直彦（日本大学経済学部准教授）
　前野高章（日本大学経済学部助手）
　陸亦群　（日本大学通信教育部准教授）
　秋山憲治（神奈川大学経済学部教授）
　鈴井清巳（京都産業大学外国語学部教授）
　山本尚史（国際教養学大学国際教養部准教授）
　張乃麗　（中国山東大学教授）
　李忠民　（中国陝西師範大学教授）
　黄湛冰　（中国陝西師範大学准教授）
　Abdujabar Rasulov（Ministry of Foreign Affairs of the Republic of Uzbekistan University of World Economy and Diplomacy世界経済外交大学Professor）
　Mirodil Mirzakhmedov（Ministry of Foreign Affairs of the Republic of Uzbekistan University of World Economy and Diplomacy世界経済外交大学Assistant Professor）
　Mukhamediyev Bulat（Head of Macro and Microeconomics Department of Kazakh National University　カザフ国立大学Professor）

III　学術講演会

第1回　2010年7月7日
　「市場主義の現段階;新自由主義の経済学を考える」
　寺西重郎（日本大学商学部教授）
第2回　2010年12月16日
　「趙紫陽と李登輝の志と生きざまに学ぶ」
　宇沢弘文（東京大学名誉教授）

IV　国際シンポジウム

テーマ：『現代アジア社会における華僑・華人の社団とネットワーク』
開催日：2010年12月11～12日
主　催：清水　純　中国・アジア研究センタープロジェクト

V　Working Papers

No.13 The Finance in the Capital Market and Credit Rating in China, September 2009. (Naoki Murakami)
No.14 The Finance in the Capital Market and Credit Rating in Taiwan, September 2009. (Naoki Murakami)
No.15 The Finance in the Capital Market and Credit Rating in Uzbekistan, November 2009. (Mitsuru Mizuno)
No.16 The Finance in the Capital Market and Credit Rating in Bangladesh, November 2009. (Mitsuru Mizuno)
No.17 Effectiveness of Capital Controls in Asia: India and China as successful case for capital account liberalization, February 2010. (Hideaki Ohta)
No.18 Effectiveness of Capital Controls on the Economies in Indonesia and Malaysia, February 2010.(Hideaki Ohta)
No.19 Bond Market and Rating Agencies in Thailand, March 2010. (Hideaki Ohta)
No.20 小泉改革の新自由主義・市場規律導入政策の本質；我々は開発主義であったか　October 2009.（寺西重郎）
No.21 中国へのアウトソーシング　May 2010.（乾友彦，井尻直彦，濵田治雄，木村政司）
No.22 Immigration Policy and Sustainability of Social Security in Japan, May 2010. (Naomi Miyazato)
No.23 Foreign Direct Investment and Foreign-educated Labor,May 2010. (Jinyoung Kim, Jungsoo Park)
No.24 神田祭―大都市の祭礼における現代的変容 November 2010.（清水純）

VI　2010年度中国・アジア研究センター運営委員会

委員長	本多光雄
副委員長	黒沢義孝
委員	小川直宏，小坂国継，福島久一，本間純，権赫旭，呉逸良，曽根康雄，宇田川理，堀切操
顧問	宇沢弘文（東京大学名誉教授） 寺西重郎（日本大学商学部教授）
研究顧問	堀内昭義（中央大学教授）

以　上